

令和 6 年 6 月 11 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04430

研究課題名（和文）「継続する絆」の概念分析と関連要因の実証的検討：新たな悲嘆理論の構築に向けて

研究課題名（英文）A concept analysis of "continuing bonds" and an empirical study on related factors: toward of the development of new grief theory

研究代表者

山中 亮 (Yamanaka, Akira)

名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授

研究者番号：20337207

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本において親密な人を喪った者は、死別経験後故人とどのようなプロセスでどのような関係を築いていくのかを明らかにし、実証的検証に基づいた日本における新たな悲嘆理論の構築を目指す。日本における「継続する絆」についての概念分析を行い、その結果に基づいて、仮説モデルを再検討した。Walker & Avantの概念分析の手法を用いて分析を行なった。その結果、先行要件、属性、帰結を見出し、これらの特徴について明らかにした。その結果をもとに、日本における継続する絆を測定する尺度に用いるための質問項目をいくつか検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本文化の特徴を踏まえた、継続する絆の再定義を行うことによって、より正確に日本における継続する絆の特徴を明らかにすることが可能となる。また、日本文化の特徴を踏まえた悲嘆カウンセリングの実践に向けての重要な知見となりうると考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the process and type of relationship that people in Japan who have lost a loved one build with the deceased after experiencing bereavement, and to construct a new theory of grief in Japan based on empirical examination. A concept analysis of "continuing bonds" in Japan was conducted, and the hypothetical model was reexamined based on the results. The analysis was performed using Walker and Avant's concept analysis method. As a result, antecedents, attributes, and consequences were identified, and the characteristics of these were clarified. Based on the results, several questions were examined to use in a scale to measure continuing bonds in Japan.

研究分野：臨床心理学

キーワード：継続する絆 悲嘆 死別 概念分析

1. 研究開始当初の背景

親密な者との死別やそれによって生じる悲嘆は誰でも体験し得るものである。これまで悲嘆プロセスは、主として Freud(1917)の「喪の仕事」概念に基づいて捉えられてきた。すなわち故人に向けられたリビドーを撤収させる作業が喪の仕事の中核にあるとされてきた。しかし近年、故人との絆を保った形で適応的な生活を送ることも十分可能なのではないかという、「継続する絆」概念が提唱された(Klass, Silverman, & Nickman, 1996)。この概念は、もともと日本人の多くが仏壇や墓参などを通して常に故人との対話を続けながら死別後の生活に適応しているという Klassら(1996)の指摘に始まる。しかしながらこの「継続する絆」は欧米にも存在することが、Shuchter & Zisook(1993)による調査研究によって実証的に示された。彼らは死別体験者の過半数の者(63%)が死別後 13 か月時に「故人とともにいると時々感じる」ことを報告している。

ただし「継続する絆」が死別後の適応に重要であるかどうかについては、一貫した結論が見出されていない。たとえば Stroebe & Shut(2005)は先行研究をレビューし、継続する絆が死別後の適応に深く関連するという確たる証拠は見出されていないと結論づけている。こうしたことから、死別後の適応との関係の複雑性を捉えることができるように、「継続する絆」を改めて定義することが重要であるという指摘がなされている(Field, 2008)。

さらに「継続する絆」のあり方には宗教的・文化的信念などが大きく影響することも指摘されている(Field, 2008)が、日本における「継続する絆」の形成要因に関する実証研究はほとんどなく、むしろ Klassら(1996)の指摘以来「日本人は故人との絆を継続する傾向がある」という安易な言説が独り歩きしている感は否めない。

以上のことから、日本における悲嘆プロセスを明らかにし、適切な支援を行っていくためには、「継続する絆」概念を整理するとともに、「継続する絆」に影響を及ぼす要因を実証的に検討し、さらにその変容・形成プロセスを明確化することが必要である。

2. 研究の目的

死別は誰もが体験しうるものである。本研究は、日本において、親密な人を喪った後に人は故人とどのような関係を築いていくのかを明らかにするものである。

まず、重要な概念となる「継続する絆」について概念精査を行い、その概念を明確化する。さらに「継続する絆」の先行要因と結果を分析し、仮説モデルを提案する。

3. 研究の方法

- 1) 対象となる文献の検索: “絆”, “死別” をキーワードとして、医学中央雑誌, CiNii を含むデータベース検索により関連文献を検索した(1970年~2022年)。
- 2) 文献情報のデータ化: 検索された文献をもとに文献リストを作成した。各文献を詳細に読み込み、分析用フォームを Excel で作成した。分析用フォームでは、文献番号、文献タイトル、著者、抽出概念、定義、先行要件、属性、属性が示す現象、帰結の9項目について原著者の表現をなるべく残すよう記載した。
- 3) 概念分析: 概念分析は、既存の概念を明らかにする、又は洗練する有用な分析法として現在主に看護学領域で用いられている。本研究では、Walker & Avant(2005/2008)が提唱した8段階の手順から概念分析を行った。これは、概念を選択する、分析の狙いまたは目的を決定する、選択した概念について発見したすべての用法を明らかにする、選択した概念を定義づける属性を明らかにする、モデル例を明らかにする、補足例を明らかにする、先行要件と帰結を明らかにする、経験的支持対象を明らかにする、という8段階から成っている。本研究では、中谷・島田・大東(2013)にならい、8段階のうち、概念を選択する、分析の狙いまたは目的を決定する、選択した概念について発見したすべての用法を明らかにする、選択した概念を定義づける属性を明らかにする、先行要件と帰結を明らかにする、の5段階に焦点を当てて分析を行なった。“概念を選択する”と“分析の狙いまたは目的を決定する”では、故人との“継続する絆”の概念を取り上げて、その概念を明らかにすることを目的とした。“選択した概念について発見したすべての用法を明らかにする”については、日本国内での概念を明らかにするため、日本語文献が検索可能な医学中央雑誌, CiNii という2種類のデータベースを用いて、得られた文献を全て確認するという形で行った。“選択した概念を定義づける属性を明らかにする”では、“継続する絆”の属性を明らかにすることとした。最後の“先行要件と帰結を明らかにする”では、“継続する絆”の先行要件及び帰結を明らかにすることとした。

4. 研究成果

医学中央雑誌及び CiNii という 2 つのデータベースで検索された文献 47 件から、“継続する絆”に関する記述があった文献は全部で 25 件であった。

これらの文献をもとに、“先行要件”、“属性”、“帰結”を抽出した。

1) “継続する絆”の先行要件

分析した結果、以下の 8 種類の先行要件が見いだされた。

【二人称の死別経験】

これは“家族の死”、“配偶者の死”、“二人称の死”、“親友の死”“ペットとの死別”などの記載から命名した。

【故人について語る】

これは、“親の会で他の参加者との対話を積み重ねていくこと”、“故人に関係のあった者同士の間で、故人の生涯を語り合う”、“故人の生と死に対して意味づけを行っていくことが重要であり、それには「語る」ということが大きな影響を及ぼす”などの記載から命名した。

【故人の内的存在の他者からの承認】

これは、“故人についての内的表象に対する他者の「承認」という記載から命名した。

【罪悪感のなさと悲哀プロセスの進行】

これは、“死別後罪悪感が強い時には絆を持つことができないが、ある程度悲哀の過程が進むことが必要”という記載から命名した。

【悲嘆夢をみる】

これは、“故人の夢をめぐる作業”、“悲嘆夢をみる”という記載から命名した。

【死生観の意識化】

これは、“死別経験後に死後の世界観を形成”、“人は死んだらどうなるのか?”という問いを抱く”などの記載から命名した。

【故人の他者化】

これは、“故人の他者化”という記載から命名した。

【故人への思慕と故人への問いかけ】

これは“社会との関わりを避けて過ごして、故人のことを思い浮かべ、問いかけて対話を繰り返す”という記載から命名した。

2) “継続する絆”の属性

分析した結果、以下の 7 つの属性が見いだされた。

【故人の内面化】

これは、“内面的な世界”、“遺族にとって故人が何らかの形で、精神化もしくは内面化されている”、などの記載から命名した。

【社会的に生き続ける】

これは、“二人称の次元で継続する死者の社会的な生”、“死者のための適切な場所を生者の生活のなかに見出していく”などの記載から命名した。

【心的補償機能】

これは、“変わらない世界を求め、いつも一緒にいることを求める補償”、“もう一度会いたいという切々とした願いを叶えること、切れる寸前の絆を結び直そうとする補償作用”という記載から命名した。

【抽象的形態】

これは、“抽象的な形態としての継続する絆”という記載から命名した。

【不適応的対処】

これは、“不健康的な対処行動パターン”という記載から命名した。

【臨在感】

これは、“臨在・気配が含まれる”、“実体的な形態としての継続する絆”などの記載から命名した。

【超越的感觉】

これは、“超越的次元”、“生者と死者が死を越えて繋がる感覚”という記載から命名した。

3) “継続する絆”の帰結

分析した結果、以下の 10 の帰結が見いだされた。

【安らぎを得る】

これは、“遺された人の不安感や寂しさを和らげる”、“絆を感じることは心の安定に寄与する”などの記載から命名した。

【行動の動機づけ】

これは、“故人に報告できるように様々な経験を能動的にする”、“遺族の行動の指針や原動力になっている”などの記載から命名した。

【悲嘆を和らげる】

これは、“悲哀の過程の促進を助ける”、“悲嘆の解決に役に立つ”などの記載から命名した。

【生き方を見つめる】

これは、“自分の生き方を見直す”という記載から命名した。

【自己肯定感が高まる】

これは、“自己肯定感を高める”という記載から命名した。

【支えとなる】

これは、“後期高齢者の一人暮らしを支える”、“遺された人を支える”などの記載から命名した。

【故人とのつながりの再認識】

これは、“故人との間に生前に引き続き情緒的な交流を生み出す”、“故人が大事な存在だったと気づく”などの記載から命名した。

【他者理解の促進】

これは、“人々の痛みを抱え継続する絆を持ちながら生きていくことへの共感”、“地域住民の死を共に受け入れる意識へと展開”の記載から命名した。

【新たな信仰心の芽生え】

これは、“信仰心をもつようになる”の記載から命名した。

【不適応状態につながる】

これは、“精神的不健康”、“故人との絆に執着し、これからの生活や人生に取り組みとうしない不適応的対処パターン”などの記載から命名した。

以上の分析結果から、日本における“継続する絆”は、大切な人との死別を契機に、故人について他者と語ったり、故人へ問いかけることを通して形成されることが示された。また“継続する絆”を結ぶことで、ポジティブな結果だけでなく、ネガティブな結果につながることもありうることが示された。

引用文献

- Field, N. P. (2008). Whether to relinquish or maintain a bond with the deceased. In M. S. Stroebe, R. O. Hansson, H. Schut, & W. Stroebe (Eds). *Handbook of bereavement research and practice: Advances in theory and intervention*, pp.113-132, Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Freud, S (1917). Trauer und Melancholie. *Gesammelte Werke*, 10, 427-446. (フロイト, S. 伊藤正博(訳) (2010). 喪とメランコリー フロイト全集第14巻, 429-446.)
- Klass, D., Silverman, P. R., & Nickman, S (1996). *Continuing bonds: New understanding of grief*. Washington, DC: Taylor & Francis.
- 中谷啓子・島田涼子・大東俊一 (2013). スピリチュアリティの概念の構造に関する研究 「スピリチュアリティの覚醒」の概念分析 , 心身健康科学, 9, 37-47.
- Schuchter, S, R., & Zisook, S (1993). The course of normal grief. In M. S. Stroebe, W. Stroebe, & R. O. Hansson (Eds). *Handbook of bereavement: Theory, research and intervention*, pp.23-40, Washington, DC: American Psychological Association.
- Stroebe, M. S., & Schut, H. (2005). To continue or relinquish bonds: A review of consequences for the bereaved. *Death Studies*, 29, 477-494.
- Walker, L, O., & Avant, K, C (2005). *Strategies for theory construction in nursing*, 4th ed., New Jersey: Appleton & Lange. (中木高夫・川崎修一(訳) (2008). 看護における理論構築の方法. 医学書院)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

故人との継続する絆に関する心理学的研究
<http://www.kizuna-research.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田上 恭子 (Tagami Kyoko) (80361004)	久留米大学・文学部・教授 (37104)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関